

埼玉真光市在住の詩人、山本かずさん(高知市出身)が、「真・将門記」と「日日草」を相次いで刊行した。

「真・将門記」は書き下ろし小説。平将門の乱を記録した軍記物語「将門記」を大胆に読み解き、真の人間像に迫ろうとする。

将門は本来、心優しい人で、誰かに疑心を抱くことがなく、好んで戦を仕掛けることもなかった。しかし、武士の台頭を恐れる京都朝廷、覇権と領地の拡大をもくろむ一族らの謀略によって、血で血を洗う争乱に巻き込まれていく。

最後は朝敵となって敗亡するが、将門は自ら「新皇」と名乗りはしなかった。「将門は生まれ育った坂東の地を愛していた。まずは坂東の地に下



著日 新の「日信生 織田さん」と「真・将門記」(表紙紙絵) 山本かずさん

山本さん(高知市出身)

「真・将門記」独自の平将門像 「日日草」哀惜こもる歳月

トビを実現したい、と考えていたのであつ明、蛭井沢の別荘に招いた。そこは、戦もないてくれた谷川俊太郎、民たちが自由で平等に生きられる独立国家であつた。

山本さんは、「将門記」の穴落部分を「クシヨ」で埋めるとどの中央病院で母親を看(み)取った思い出の、妻や子への情愛な一編。屋上の花壇から手を折ってきた日日草の花が、臨終の近い母親をひどく喜ばせたのだという。

もう一冊の「日日草」は、来し方を回顧したエッセイ集で、1996年に本紙学芸面に連載された。装画は織田信生さん(高知市在住)。

山本さんはこのなかで、幼い時分からの家族との暮らして、いろいろな出合いや別え帰るわたしを見送る、喜びや悲しみに彩られてきた出来事など、過を振っている父がい

相次ぎ新著

932年生まれ。詩集「渡月橋まで」に「サイトホテル」「不惑池は牡丹だけ」などがあり、「フィラータ」として活動してきた。

(真・将門記はミッドナイトプレス発行、星雲社発売、1785円。「日日草」は北冬舎発行、2100円) (片岡雅文)